

久遠ということ

望 月 海 淑

歴史的事実の否定

久遠といえ、それは釈尊の寿命の長さのことを示すものと、法華經の教えの中では考えられている。それを宗門では久遠実成という成語で理解しようとしている。しかし、それをどう表現するのかについては、極めて曖昧なように思われる。日蓮聖人が描かれた御本尊が久遠実成の釈尊のことであると一般には理解されているようであるが、そのための表現……例えば回向文を見ていると、久遠実成の釈尊といいながら、証明法華の多宝如来を招聘し、様々な佛・菩薩・佛弟子の御名を連ねている。本来、久遠実成の釈尊というのは、大曼荼羅の全画面を意味するのではなからうか、と思われるからである。

ここでは、その辺の意味を探ってみようと思うところである。

久遠実成は、釈尊の寿命の永遠なることを示す言葉であるから、まず、久遠ということについて、やはり如来壽量品を見るべきであろう。そこで如来壽量品を見ると、そこには、

【妙法蓮華經の説示】（以下、妙法華經と略す）

「我、少くして出家し、阿耨多羅三藐三菩提を得たり。然るに我は實に成佛してより已來、久遠なることかくのごとし。ただ方便をもって衆生を教化し、佛道に入らしめんとして、かくの如く説をなすなり。」(42下)⁽¹⁾

と示されている。これの前半は釈尊がインドの王舎城を出て、出家して道を求

久遠ということ（望月海淑）

め、難行苦行のすえに、ブツダガヤの菩提樹の下にすわり禪定に入り、明けの明星を見て突然に開悟したことを示したもので、それは佛伝などにも示され、広く知られているところのものである。すなわち、歴史的な史実であろう。ところが後半においては、そうではなくて釈尊が覚りを開いたのは、そんな数十年の前のことではなくして、事実、覚を開いたのは久遠の昔のことであるのだ、といわれたところのものである。これは歴史的な事実の否定であることは明白である。何故に、このような論理の飛躍が行われたかについては、この前の従地涌出品の論理の展開にかかわるのであるが、それについては、後述することになるであろう。

法華經の漢訳本について、三訳三存（六訳三存という説もある）といわれている。すなわち、西晋の景帝の太康七年（A.D.286）に敦煌菩薩と称せられた竺法護によって訳された正法華經と、姚秦の文桓帝の弘始八年（A.D.406）に鳩摩羅什によって訳された妙法蓮華經と、隨の文帝の仁寿元年（A.D.601）に闍那崛多と達磨笈多との共訳になる添品法華經の三本がある。このうち、添品法華經には、序が書かれており、そこには、鳩摩羅什訳の本には葉草喩品の半（後半）と富樓那及び法師品の二品の始め、提婆達多品・普門品の偈が欠けている、（大正8-134下）と示され、これらを今、訳して付け加えた、ということが示されており、他の訳文は妙法華經の、ままであるから、今はこの添品法華經は問題にならない。

そこで正法華經を見ると、

【正法華經の説示】

「はじめて無上正真道を逮得し最正覺を成じたというも、如来は成佛して已來、甚だ久しい。故に佛は説いていう。佛を得て未だ久しからず、ゆえはいかん、衆生を化せんと欲するが故なり。」（113下）

と、示されているから、久遠というのは甚だ久しい前からということであろうが、そのように未だ久しからずというのは、衆生を導くためであったとしてい

る。

【梵文法華經の説示】

「比丘等よ、我は少くして出家し瞬時に覺り、無上等正覺を得たのだと語った。しかし、実に善男子よ、このように如来が久しい以前に覺を開いたのだと語り、最近に覺を開いたのだと語るのも、この法門を私は他の衆生を成熟させ、会得させるためであったのだ。」(270)

と、示している。妙法華經が久遠と訳した言葉は、久しい以前ということであるが、要は少くして覺を開いたのも釈尊ならば、久しい以前（久遠）の昔にすでに覺を開いていたのも釈尊であることを意味していることになり、それは衆生を導くためであったということになる。妙法華經が「方便をもって」という一句を付け加えていることは、まことに妙なる訳語だというべきであろう。すなわち、インド出現の釈尊が菩提樹の下で覺を開いたというのは、歴史的な事実であったろうが、法華經ではこの始成正覺を事実ではないのだというために、久しい以前（久遠実成）に覺を開いたのだというのであるが、何故に、こんなことをいうのかとの疑問については、衆生を正しい覺りに導くための方便の説であったのだ、ということになるであろう。

遙かな昔（前世・pūrva）

何故にこんなことをいうのか、直截な疑問の解明は從地涌出品にあるのだが、その前に、このような現実を超える説示が示されるための伏線が、すでに以前から法華經には存在することを指摘しておきたい。それは、法華經の種々の品において示されるのであるが、先ず序品と化城喩品の説示を取り上げ、さらに譬喩品の説示をもって解明しておきたい。

序品では、釈尊が禪定に入ったまま何も仰せにならない、こんなことは從來なかったことなので、集まっている人々は疑問を感じた。そこで、弥勒菩薩がみんなの疑いの念を代表して、文殊師利菩薩に質問をしている。すると、文殊

久遠ということ（望月海淑）

師利菩薩は前世における事実を語った。それは不可思議なことだった。

遙かな昔（前世・pūrva ピュールバア）に日月燈明如来という佛が出現したことがあった。この佛は今の釈尊のように何も仰せにならない、おかしいなどみんなが思った。時に、過去の諸佛の例を見ても、今の佛と同じであるから、それに習って見ると、日月燈明如来はこれから法華經という大法をお説きになる筈である、というのであり、果たしてそのように法華經が説かれたのだというのが、文殊師利菩薩の答であった。

この時にさらに注目すべきことが、一つ示されている。二十億の菩薩たちが教えを聞こうと樂欲しているのを知って、日月燈明如来は妙光菩薩に因せて、妙法蓮華・教菩薩法・佛所護念という法華經をお説きになった。これを聞いた妙光菩薩は法華經を持ち、日月燈明如来が出家する已前の八人の王子にたいして、法華經を説いて聞かせて覺に至らしめた。一方、弥勒菩薩は、その時の名前を名利を求めるといふ名前の求名といていたので、名前の通りに法華經を聞いても自分の利益だけを考へて、他の人に道を説こうとはしなかつたので、その時に覺を開くことができなかつたと説かれている。

すなわち、ここでは教えを聞くだけでは駄目で、聞いたものを人に伝えることをしなければならぬことを示している、といいうるのであろう。

次いで、化城喩品においては、大通智勝如来の前世のことが示されている。この如来は遙かな昔・三千塵点劫の昔に出現した人であるといひ、このことを示すために、それは甚大な昔で久遠であつたと示されている。それは、

【妙法華經の説示】

「彼の佛は滅度したまいしより已來、甚だ大きく、久遠なり。」(22上)

【正法華經の説示】

「かの佛、經を説いてから不可称限なり。」(88上)

【梵文法華經の説示】

「比丘たちよ、この佛はどれほど遠い昔に出現したのだろうか。」(141)

久遠ということ（望月海淑）

というのである。すなわち、久遠というのを不可称限、どれほど遠い昔というのであるが、これが三千塵点劫の昔だということであるから、妙法華經のように一言で久遠といったほうが明白であろう。

これは日月燈明如来と大通智勝如来の二人の佛によって、曾って法華經が説かれたことがあった、ということの説明したものであるが、それが我々とのどのように関わるのかについては、譬喩品を見るのがよからうと思われる。

譬喩品は方便品の一佛乗の説示を聞いた舍利弗が悦んで、我等は佛の子であり、佛の口より生じ、法の化より生じて、佛法の分を得たと述べるが、これにたいして釈尊は、我は昔、曾って二万億の佛のみもとにおいて、無上道のための故に汝を教化し、汝は長夜に我にしたがって受學した。我は方便をもって、汝を引導せしが故に、我が法の中に生まれた。舍利弗よ、我、昔、汝をして佛道を志願せしめたりしが、汝は今、悉く忘れて、すなわち自らすでに滅度を得たりと謂えりと語り、次のように示している。

【妙法華經の説示】

「我は、今、還って汝をして、本願によりて行ぜしところの道を憶念せしめんと欲するが故に、諸々の声聞のために、この大乘經の妙法蓮華・教菩薩法・佛所護念と名付けるを説くなり。」(11中)

すなわち、これは釈尊が、今、法華經を説く理由を述べたものであるが、他の二經にはそれぞれ次のようである。

【正法華經の説示】

「舍利弗よ、汝、本からの行に因って、無央数佛を識念することを得せしめんと欲して、則ちまさにこの正法華經の一切佛護を受くべし。普く声聞のために分別して、これを説くなり。」(74上中)

【梵文法華經の説示】

「舍利弗よ、我は汝が前世における修行と本願とを憶念させようと欲して、法華經という經典、広大な教えで、菩薩のための教え一切の佛に護念せら

久遠ということ（望月海淑）

れる教えを、声聞たちのために説示するのである。」(64)

先述のようにこの文章の前には、釈尊が舎利弗にたいして、我は昔、曾って、二万億の佛のところを汝を教化した、汝は長夜に精進をしたので方便をもって、今度は釈尊という佛のところへ出生してきた。それは前世における長い精進と本願との結果であるのに、今、前世での精進と本願とのことをすっかり忘れてしまっているので、そのことを思い起こさせるために法華経を説くのだと示している。すると、前世というのは遙かな昔のことであり、それは妙法華経においては「曾」という言葉で示されるのがほとんどであり、梵文法華経においては *pūrva prapñdhāna* の語で表現されている。すなわち、前世での佛の御許において立てた願であることを意味する⁽³⁾。そして、それは日蓮聖人によって、本願と表現されている。ためにここでも本願と訳したものである。このように佛教においては、人は何度でもこの世に生まれだしてきたのであり、その生まれ変わってきた遙かな昔において、諸佛にお会いできたことがある、という立場をとってきているので、化城喩品が久遠と名付けたのに比肩できると思われる。

再び久遠ということ

如来壽量品は先に引用した久遠の昔に成道しているのに、衆生を導くために方便をもって、ブツダガヤで覚を開いたように見せたのだ、という説示に続いて、六或示現を説き、さらに如来は如実に三界の相を知見するのだと語り、諸々の衆生には種々な性・欲・行・憶想・分別があるので、釈尊は善根を生ぜしめんと欲して、因縁・譬喩・言辞をもって法を説くのだが、このありようは未だもって廃せざるなりといい、その上で、

【妙法華経の説示】

「我は成佛してより已来、甚だ大きく久遠なり。」(42下)

と語り、(私の) 寿命は無量にして阿僧祇劫であり、常にここに住して不滅である、と告げている。

【正法華經の説示】

「現にこの佛を得て、平等の覺を成じて已來、大きく久し。」(113下)
とし、寿命は無量にして、常住にして滅度せず、と示しているから、妙法華經の久遠の語を、大きく久しいとしていることが分かる。これではただ長いということだけであろう。

【梵文法華經の説示】

「如来は、それほどに遙かな昔に覺を開き、量り得ない寿命の長さを持ち、常に存在し続けている。」(271)

となしているが、遙かな昔といい、量り得ない寿命の長さというが、これは正法華經が大きく久しいという部分に相当し、妙法華經が甚だ大きく久遠と訳したものに当たっている。久遠とは非常に長い時間のことで、それは人知の量り得ないという長さであることは明白である。

この久遠という訳語は、この前の從地涌出品において、二度にわたって示されている。この品は見宝塔品において、釈尊が（我はまもなく滅度に入る）誰か娑婆世界において法華經を説くものがあるか、と呼びかけ、勸持品で、葉王菩薩等が私達が説きましょう、と答えるのだが、釈尊は返事をせず、末法において法華經を説くのは甚だ困難なことなのだ、と、そのための心構えとして安樂行品を説かれた、という一連の流があり、その流は從地涌出品に続けられている。その從地涌出品の冒頭では、他方來の菩薩達が私たちが法華經を説きましょうというのだが、釈尊は「止みなん、善男子」といい、之を須いずに拒否されて、すでにその人々は用意してある、と答られた。

すると大地が震動し、その中から無限な菩薩達が涌きだされた。この菩薩達は、身体は金色で三十二相をそなえていた、というから、もう佛になるべく予想されていた菩薩達だということになる。この大地から涌出した菩薩達は、地涌の菩薩と呼ばれるが、代表者は四人で上行・無辺行・淨行・安立行菩薩と呼ばれるが、肝心なことは、この菩薩達はすでにして釈尊と旧知の間柄であり、

久遠ということ（望月海淑）

釈尊から導きを受けた人々であった。それから名前にすべて「行」という文字をもっていることで、おこないを伴うべきことを意味しているということである。

それを示すために、この菩薩達は出現するや釈尊にたいして、「世尊よ、少病・少悩にして、安樂に行じたまえるや、否や。云々」（40上中・110下111上・256）と述べている。そして更に、釈尊は、「この諸の衆生は世世より已来、常に我が化を受け、亦、過去の諸佛において供養し尊重し諸々の善根を植えられたばなり」と述べ、我が教えを聞いて信受し如来の慧に入ったのだ、とも示している。（40中・111上・256、257）

この中で、世世より已来、常に我が教化を受けたという一句は、譬喩品で舍利弗を釈尊が導いた部分、昔、二万億の佛の御許で舍利弗を教化してきたのに、舍利弗はそれを忘れてしまっているから、それを思い起こさせるために今、法華経を説くのだと語ったところと、理念的には相通ずるものがあると思われる。そしてこのようなことは、現実の世界とは離れているので、弥勒菩薩を始めとする人々は疑いを懐いた、釈尊の生涯の中で、釈尊が地下の虚空世界へ行ったというようなことはないのに、おかしい、と。

かくて釈尊は弥勒菩薩等の疑いを晴らすために、地涌の菩薩について語るのであるが、その言葉の中に、久遠という言葉がでてきている。

【妙法華経の説示】

「我は今、実語を説かん。汝等よ一心に信ぜよ。我は久遠よりこのかた、これ等の衆を教化せり。」（41中）

【正法華経の説示】

「今、佛の所説は、至誠無漏にして聞かば佛を歎詠し、皆、まさに之を信ずべし。開化・發起せるこの諸の群英は、久遠よりこのかた尊正道を立てん。」（112中）

【梵文法華経の説示】

久遠ということ（望月海淑）

「あるがままの（真実の）無漏の我が言葉を聞いて、すべての人は我を信ぜよ。このように、我は遙かな昔に最高の覚を獲得し、すべての人は我によって成熟させたのである。」(263)

というのが、それである。更に、弥勒菩薩は、釈尊が釈迦族の太子として生まれ、伽耶城の近くで菩提樹の下に坐って覚を開かれ、それからまだ四十余年ほど過ぎたばかりです。こんな短い間に、地下の虚空世界に行くというような大きなことがなし遂げられたのでしょうか。これができたというのは、佛の勢力によってなのでしょうか、佛の功德によってなのでしょうか、とって大きな疑問を投げかけた。そしてこのことに関して、次のように述べている。

【妙法華經の説示】

「たとい人あって千万億劫において数うとも尽くすこと能わず、その辺をも得ず。これ等は久遠より已来、無量無辺の諸佛のところに於いて、諸の善根を植え、菩薩の道を成就し、常に梵行を修せり。世尊よ、かくの如きことは、世の信じ難きところである。」(41下)

【正法華經の説示】

「今、この菩薩の大会の衆は、悉くみんな如来が開導せるところであり、部党部党の衆は多くて無量なり。久しく梵行を修し、衆の徳本を植え、無数百千の諸佛を供養し、たとい成就をはからんと欲しても、已来、劫の数は無限なり。」(112中下)

【梵文法華經の説示】

「世尊よ、それほど多くない時の中で、無上の等正覚を勧められ、成熟された菩薩の集団・菩薩の群衆、この菩薩の集団・菩薩の群衆は、百千万億劫も数えられたとしても、その終局を見出すことはない⁽⁴⁾。このように、世尊よ、無量の菩薩・摩訶薩は数えられない長い行い・梵行を修して、百千という沢山な佛のところで、善根を植えたもので、百千の沢山な劫を修して成熟されました。」(264)

久遠ということ（望月海淑）

というのであるが、妙・正・梵の三經の表現はいささか異なっている。すなわち、妙・正の法華經では、釈尊が地下の虚空世界へ行っただけというようなことは、理解しがたいというのであるが、梵文法華經では、終局を見出すことはない、といいながら、その後百千の劫を経て成熟されたという一句が入っている。この意味は明白ではないが、次の如来壽量品の説示への関連を見ようとしたのだろうか。いずれにしろ、妙法華經が久遠と訳したものは、久しく無量の時間、百千の劫という長い時間を持つということであろう。これは逆にいえば、論理の逆転といわなくてはならない。そこで、弥勒菩薩は有名な黒髪の青年が白髪の老人をさして、これは私の子供で私が生育したのだ、と語り、論理の逆転であり、信じられないことを示している。ここには重要な問題があるが、これについては項を改めて述べることにする。⁽⁵⁾すなわち、釈尊の生命を八十年とだけで捉えていることでは、地涌の菩薩という未来を指向する菩薩のありようは、理解の外だといふべきであろう。

虚空世界ということ

先に論理の逆転だといったが、それは形のあるものを見るという物理的なものの見方から、形而上的なものの見方への転換を意味するであろう。釈尊が自分の周りにいた人々、他方の國からきた諸の菩薩達が、釈尊の滅後に法華經を私達が説きますといったことを、拒否されたのには、この人達には意識の転換が見られないからであったと思われる。

法華經において空中・antarikṣa と虚空・ākāśa の二語が、使用されているのであるが、ここで重要な問題は、妙法蓮華經が見宝塔品の冒頭で antarikṣa を空中と訳しているが、それ以外のところでは、すべて ākāśa と同じく虚空という訳語を使用していることである。⁽⁶⁾

空中とは青空というような空のことであり、目で見えて観ずることができるものであるのにたいして、虚空というのは目に見えるものではなく、我々の住む

久遠ということ（望月海淑）

この世界のすべてのものを自在に包み込んでしまう広大な広がりのことであるから、前者が可視的であるのにたいして、後者は理念的な世界・哲学的な世界を意味する。すなわち、そこでの両者の言葉の内容は、まったく違っているという大きな問題がある。すなわち、見宝塔品で多宝如来が出現してきて空中・antarikṣa に浮かんだという場面などは、空中・antarikṣa をもって語られるのであるが、それ以降であっても従地涌出品で、地涌の菩薩等に関する場面では、この菩薩等が住んでいた地下の虚空世界、さらに、この菩薩等が涌出して空中・antarikṣa にいる釈尊のところに行かれた場面では、突如として空中・antarikṣa の場面が虚空・ākāśa の語を持って変更して表現されているのである。梵文法華経で見る限りにおいて、この空中の語と虚空の語との間には違いが存在していることは明白である。いや、実は梵文法華経だけではないのである。それは後説する。

梵文法華経においては、虚空・ākāśa の語は見宝塔品では使用されず、従地涌出品の地涌の菩薩に関わる箇所だけの使用である。これはまったくこの二つの言葉の意味が、違う意味をもっていることを示すからであろう。

尚、ここで一言付け加えておくべきことがある。それは見宝塔品の最後の偈の中では ākāśa の語が使用されているが、これは巨大なものを表現しようとしたものであり、それ故に虚空・ākāśa を形あるものと捉えて見て、虚空をもって遊行するとしても未だ難しとはなさず、というように、出来もしないことを出来るように謎かけをし、難しいことをなすための譬喩に使用したにすぎないから、問題外のことである。

それ故に、正法華経は多宝塔が涌き出したことに関わるくだりでは、antarikṣa を空中と訳しているが、地涌の菩薩に関わるところでは、ākāśa を「撰護国土」「撰護度界」と訳している。撰護国土というのは、諸佛によって護られている国土・世界ということであるから、その世界はまったく違う世界だといわなければならないであろう。何故に、鳩摩羅什の妙法華経では、この二つの言葉を

久遠ということ（望月海淑）

同じに訳してしまったのか、その原因は分からない。

何れにしろ、釈尊の生涯を八十年としてだけで捉えているならば、釈尊が地下の虚空世界へ行き、教えを説き、無量の人々を教化するというようなことはありえないであろう。これは何故か。そこには法華経が説示の内容を根本的に変えようとした意図を見ることができよう。地涌の菩薩の出現は釈尊の未来への指向を感じさせるものである。

このことにかんして、中村元博士は次のように、重大な意見を述べている。「釈尊はシャカ族から出家して、修行してさとりを開き、八十歳で入滅したと考えられています。しかし、じつは釈尊は永遠の昔にさとりを開いて、たえず衆生を教化してきたのです。常に存在し、とどまっています。人間としての釈尊は、ただ人々を導くために仮に姿を滅した、その方便の姿にほかならないということです。そして、いろいろな教えは、肉身としての釈尊の教えではない。それらの教えを成立させる根源は、時間的・空間的制約を超えていながら、しかもそのなかに現れてくる絶対なもの、諸法実相のことわりにほかならない、ということです。これが久遠の本佛、永遠の、根本の佛という考え方で⁽⁷⁾と。すなわち、法華経は時間・空間の制約を離れるために、遙かな昔を久遠となし、現実には行ってもいない地下の虚空世界を設定すること、地涌の菩薩を設定することによって、過去（昔）と現在と未来とを結びつけるために、制約を離れようとしたのではなかろうか。

信ずるということ

しかし、こういうことをするためには、法華経への信仰者の心をも変えなければならぬ。その鍵の一つは、従地涌出品と如来壽量品にあると考えて見た。それは、釈尊が弥勒菩薩の質問に答えた言葉の中で、この地涌の菩薩等は「汝等が昔より未だ見ざるところの者なり」（41中）といい、更に、これは再説になるが、

【妙法華經の説示】

「我、今、実語を説かん、汝等一心に信ぜよ。」(41中)

【正法華經の説示】

「今、佛は至誠・無漏を説くところなり、佛の歎詠するところを聞き、皆まさに、これを信ぜべし、」(112中)

【梵文法華經の説示】

「あるがままの無漏の我が言葉を聞け、すべてのものは我を信ぜよ。」(263)

と語っているが、妙法華經が示す実語というのは、bhūta vācā を訳したもので、bhūta は√ bhū という動詞の過去分詞であるから、それは bhū という言葉がもっているところの「…がある」という意味を基本としている。それ故に、この bhūta という言葉は、諸法実相と訳されることもある。すなわち、ものがそこにあるということをお前提としている。「あるがまま」と訳したのも、そこに「…ある」ということを示すためである。vācā は言葉であるから、「実語」と訳されたのであろう。実とはあるがままということに外ならない。尚、岩本裕博士訳の岩波文庫版の『法華經』下巻、松濤誠廉博士等訳の『法華經』Ⅱ巻、植木雅俊博士訳の『法華經』下巻においては、共に「真実」と訳されている。

釈尊は新しい法を作ったのではなく、この世にあるすべてのものを見て、そこにある繋がりを発見されたものであり、それを縁起・空・諸法実相などの言葉で表現したもので、この考え方がすべての釈尊の教えの基本にあるといわれているので、ここでは素直に「あるがまま」と訳したもので、真実という訳に逆らうものではないささかもない。

これに続いて如来壽量品では、その冒頭において釈尊と弥勒菩薩との間でのやりとりが、三度に亘って展開されている。それは、

【妙法華經の説示】

「汝等よ、まさに如来の誠諦の語を信解すべし。」(42中)

【正法華經の説示】

「悉くまさに佛の誠諦の至教を信ずべし。」(113上)

【梵文法華經の世対】

「善男子よ、我を信頼し、如来のあるがままな言葉を信ぜよ。」(268)

と、繰り返され、弥勒菩薩も三度に亘り、信じます、と答える場面がそれである。妙・正の両法華經が誠諦と訳したものは、梵文法華經の *bhūtām vācam* を訳したものであるが、それについては、先述した通りである。そして、これは從地涌出品において、実語・至誠無漏の説と訳された語と同じ内容である。

こういうことを押さえて、如来壽量品では信ずるとということが強調されたわけであるが、それは八十年という歴史にのみ拘泥しては、釈尊の久遠を理解することはできないので、信ずるという方法しかないことを示したものであろう。法華經において久遠を把握する道は、ここにしかないであろう。この久遠なる佛の生命を譬喩をもって示そうとしたものが、五百億塵点劫の説示であることは明白である。

この五百億塵点劫を説いたすぐ後に、六或示現が説かれている、それは「(如来が)言説するところは、皆、實にして虚しからず」(42下)「如来が諸の講演するところは、皆、實に至誠にしてこれ虚妄にあらず」(113下)「如来がどのように語ったとしても、如来によって語られたすべての法門は正しく、如来には妄語はない」(271)と説示されている。これは先述の誠諦の語と同じ内容のものであるが、これに引き続いて、如来は如實に三界の相を知見す、で始まり、實に非ず虚にあらず、と続き、種々に法を説き、なすべきところの佛事を未だ曾って暫くも廃せざるなり、とし、成佛してより已来、甚だ大きく久遠なり、と説示が展開されている。ここに示される説示は、久遠の本佛の働きを示すものであり、佛教の基本理念を踏まえた上において、久遠実成の生命が展開されることを示したものであろう、と思われる。したがって、ただ信ずるべきだという論理であろう。

では、どうなのか

日蓮聖人は臨終の場にのぞんで、「十三日の辰の時、御自筆の曼荼羅と隨身の釈迦佛の御前、…⁽⁸⁾」と、あるように、枕元に曼荼羅を掛けさせたといわれてきている。これは曼荼羅こそが久遠実成の本佛であることを示したものと考えられる。その曼荼羅には真ん中に南無妙法蓮華經の御題目が描かれ、両側には釈迦牟尼佛と多宝如来が描かれている。この釈迦牟尼佛は、いわずと知れたインドに出現し、菩提樹の下で覚を開かれ、教えを説きだされた釈尊であり、多宝如来は、その教えの究極として説かれた法華經の正しさを証明なされた佛であり、見宝塔品では、釈尊が説かれた法華經が正しいことを証明なさり、半座を譲り二佛並座となったことが示されている。とすると曼荼羅に示される釈尊はインド出現の佛であり、後にいわれる応身佛としての佛でなければならない。そしてこの二佛の両側に地涌の菩薩の代表者の四大菩薩がおいでになり、未来への道が示されている。

さらに、法華經の冒頭の序品で活躍された文殊師利、最後の巻末で活躍される普賢菩薩が描かれている。そして最初に授記を授けられた舍利弗・次いで授記を受けた迦葉が描かれている。

そして、天龍八部等の諸天善神、インドの古来からの信仰を集めていた梵天王ら、日本古来の天照大神・八幡大菩薩がおり、悪人提婆達多・阿闍世王、更には龍樹菩薩・天台大師等も描かれ、東西南北には持國・広目・毘沙門・増長天王が描かれている。

このありさまは、まさにインドから中国・日本へと繋がる、まさに一代絵巻であり、法華經が説かれて已来のすべての場面の縮図であるといえよう。

これはまことに佛滅後二千二百二十余年の間、一閻浮提未曾有大曼荼羅也といわれうるものであると考えられる。これを枕元に掛けさせたというのは、これこそが久遠の本佛の姿だと思われる。このことは、本来すべての人が知って

いるところである。

そこで回向文を見てみよう。先ず、宗定・日蓮宗法要式の勧請文には、「謹んで勧請し奉る、南無輪圓具足未曾有大曼荼羅御本尊、別しては南無久遠実成大恩教主本師釈迦牟尼佛、南無証明湧現の多宝大善逝、…⁽⁹⁾」とある。ここで問題は久遠実成大恩教主本師釈迦牟尼佛といいながら、南無証明湧現の多宝大善逝と続けていることである。

先述のように、久遠実成の本師釈迦牟尼佛というのは、法華経全体のことであるから、それは法華経そのものであるということになる。しかして、釈尊が多宝如来から証明を受け並座したというのは、見宝塔品だけの説示であり、それはインド出現の佛の時のことであるから、釈迦牟尼佛が多宝如来と並座したというのは、久遠実成の本師釈迦牟尼佛と表現した時には、あり得ないこととなるであろう。

先日（2013-4-28日）伯母の三回忌の法要で、富士宮市の代立寺にお参りしたが、その須弥団には日蓮聖人の大曼荼羅の模写が美々しく掛けられており、前に日蓮聖人の坐像をお祀りになっていた。これを見て、あっこれこそ久遠実成の釈迦牟尼佛だ、感銘したものだ。普通はこの曼荼羅の諸尊を木造で現しているが、それは一向にかまわないことだと思う。問題は回向文である。久遠実成の本師釈迦牟尼佛と唱えながら、多宝如来や様々な諸尊を迎えよとする回向文のことである。釈尊がおいでになり、多宝如来や諸尊がおいでになる時には、その釈尊は久遠実成の釈迦牟尼佛ではないからである。多宝如来等と呼び出すためには、久遠実成といわず、ただ本師釈迦牟尼佛とお呼びするべきではなかろうか、もう一度真剣に考えて見て欲しいところである。

注

- (1) ここの数字は大正大蔵経の第9巻の頁数である。以下、正法華経の場合も同様であり、梵文法華経の場合は【Saddharmapūṇḍarīka - sūtram】 Romanized and revised text of Prof. Wogihara and c T.suchida 本の頁数である。

久遠ということ（望月海淑）

- (2) 岩本裕訳の岩波文庫版の『法華経』上巻では、「求法者をいましめ」と訳されているが、植木雅俊訳の『法華経』上巻では、「菩薩のための教えを」と訳されている。その理由として bodhisattva（菩薩）と avavāda（教え）の複合語の男性・単数・対格であるから、これを「菩薩をいましめ」としているのは無理がある。となされているから、これに従った。
- (3) このことについては、拙著『法華経における信と誓願の研究』第二篇「法華経における誓願論」に詳しいので、参照されたい。
- (4) この箇所について、植木雅俊氏の『法華経』下巻、218頁では、訳者が注記をつけている。詳しくは該書を読んで頂くのがよいが、それによると、中公版ではとして、そのⅡ巻99頁の訳文をあげ、批判を展開している。
- (5) 今まで説示してきたところ以外に、方便品の長い偈の最後の近くで、妙法華経は「久遠劫よりこのかた、涅槃の法を讃示し、生死の苦を永く尽す。我は常にかくの如く説けり。」(10上)と示し、梵文法華経には「我は長い間教えを説き、涅槃の境地を説いてきた。また、生と死の輪廻の終局だと、我は常に語ってきた。」(55)という一句がある。更に、化城喩品の中においても、大通智勝如来について、「彼の佛滅度したまいしより已来、甚大にして久遠なり。」(22上)とあり、正法華経は「其の佛は経を説くこと不可称限なり。」(88中)とあり、梵文法華経には、「比丘達よ、この如来はどのくらい遠い昔に出現したのか。」(141)とあり、これに続いて三千塵点劫が説かれているので、非常な遠い昔であることを示し、そのために久遠という訳語になったと思われる。
- (6) このことについて、今、一々場面を挙げて指摘することはできないので、拙論「羅什訳妙法華経の二三の問題」(身延論叢・第14号)を御覧願いたい。
- (7) 中村元著『法華経』(現代語訳 大乘佛典・2巻)頁143・144。
- (8) 鈴木一成編著『日蓮聖人正伝』頁313。
- (9) 宗定日蓮宗法要式第9版、頁13・14。